



巻 頭 言

シルバー フェーミング

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事 石田三雄
三共株式会社 農薬部門担当 取締役

農家の後継者不足が大きく取り上げられて久しいが、未だ有効な解決策は見出せていない。とりわけ中山間地についてはこれといったアイディアもなさそうだ。この際むしろ発想を180度転換して、一部の農業を高令者でも可能なように逆に作り変えることを考えた方が現実的ではないだろうか。

標題のシルバーフェーミングは、年金生活に入った人に稲作、とりわけ中山間地の米作りを分担してもらい、同時に「水」と「緑」を保全する役割を担ってもらおうという提案である。これには3つの必須条件がある。第1は、年金収入があるため生活が農業収入に依存しないことである。第2は、都市近郊の狭いアパートで老後を送るよりも（どこに居ても同じ年金が入るのだから）空気と水のおいしい田舎に帰ろうか（行こうか）という人に、楽しくかつ活発な社会生活が営める場を提供するための社会資本の投下である。そして第3は、稲作を熟年でも可能のように超軽作業化する技術開発である。

平成5年で65才の人は約131万人で、毎年これ位の人数が65才になるから、その1%がシルバーフェーミングをやってくれば、6,000組以上の夫婦が田園で熟年生活に入る計算になる。後継者不足ということは無いのではなからうか。

現在その年令の人は、あのつらく苦しい田園での農作業を憶えているが、現在の稲作は往年とは比較にならない程に軽労働化されており、産官学あげて更なる技術開発をすれば、相当高令になっても米作りは可能で、その技術的裏付けも容易に示すことができる。ここでは第3の条件の超軽作業化されたシルバーフェーミングのイメージを紙面の許す限り画いてみたい。

『淳二は長い商社勤めのあと父の残した田園に戻って早や7年になる。67才にしてはまだシャキッとしているが時々腰の痛みに年令を感じる。70aの緩斜面の田圃での直播は、極めて軽量のリモコン播種機に薬剤コーティングされた種籾と緩効性肥料とを充填し、携帯用椅子に腰かけたままで畦からいとも簡単な操作で可能。これらの機械や資材は、夜間電力で充電したゴルフ場のカートに似た運搬車で運ぶので腰に負担はかからない。定年後だから急ぐ必要はなく、すべての機械はスローでよいので故障も危険も少ない。種播きも1日に70a全部やらなくても少しづつやればよい。毎日が日曜日なんだから。』

除草剤は、ジャンボ剤というタイプのものでカレンダーに印をしておいた日に10aに10袋を手で投げ込むと袋が水に溶けて薬が水面に広がり、これですべて終り。孫の方が投げるのがうまい。病気や害虫の防除もこれまた手で投げ込むだけでよいバック剤が簡単に手に入る。雨が降っても傘をさして、農事試験場の言う通りに撒けるので良く効く。肥料は直播の時に土中に埋め込まれていてそれで収穫まですべてOK。淳二に残された仕事は散歩がてらの水管理だけだ。

この地方では、すべての田圃へコンバインがスピーディーに入れるように道路が完全舗装されていて、収穫はライスセンターがあっという間にしてくれる。社会資本投下のおかげだ。明日は雨との予報。2泊で東京へ観劇と展覧会に行く妻を飛行場に送ったら、退職金で作ったハイテク書斎で好きな曲を聴きながら、久しぶりにパリの友人とインターネットで話でもするか』